

考古学のための御伽草子・猿の草子解説 首都物資流通圏

矢田俊文

めでたしとて、やがて京、堺の町屋へ誂へける道具には、荷、長持、輿車、十二の手箱、角盥、半挿、櫛箱、渡金、漿子、金壺、硯箱、文台、筆台、懐紙紙、白粉包、畳紙、塗桶、貝桶、寄懸り、解櫛、鬢櫛、垢取櫛、毛抜、鉢に油桶、角笄や眉作り、嗽茶碗に盆、香炉、沈箱、爪切、雛、張子、源氏、狭衣、新古今、古今、万葉、伊勢物語。

さて又衣装の様々は、数を尽くして見えにけり。十二単に長かもじ、白練、精好、うすたてや、折紅梅に一交ぜ、縫物、薄絵、紅染の、唐織物に緯白や、白綾、唐綾、小格子に大格子なる織物は、十六変り、四つ変り、大身変りに紅筋、地薄、地白の染小袖、秋の野摺れる摺衣、段筋、紅筋、にらみあひ、ひじきりかねに大しぐら、端紅のほかり金、朽葉、空色、柳色、山吹色や薄浅葱、玉虫色に桃の花、金欄、緞子、縫金は中々数も知らざりき。

(中略)

まづ十六日の座敷は表の主殿を飾り、三間の押板に、先年筑紫の大内殿より音信のためとて送られし牧溪の竜虎、中尊同筆の観音、花三瓶に三具足、違い棚には堆紅の盆、同香箱、屈輪の台に建蓋据へ、書院の飾りには筆荷、硯屏、筆濯ぎ、水入、花立、軸の物、硯に卦算とり添へて、柱飾りも様々也。

さて又美物は何々ぞ。上は兵庫、尼崎、下は越前敦賀の津、若狭は小浜の辺までも、飛脚を遣はして大鯛、小鯛、明石鯛、鮭、鱒、鯨、鮎の魚、伊勢鯉、伊勢蛸、近江鮎、海鼠、海鼠腸、螺、海月、栄螺、蛤、貝鮑、あから貝、田螺、烏貝、白魚、雑喉、若君の、頭堅かれ金頭、鱈、鱈、名吉、日に添へて、宝の数は鱒の魚、万代経たるだう亀の、甲を並べし細蟹や、ひふくの来る数々は、八目鰻に鯨の魚、雨には海老も飛魚や、めでたき王余魚、数の子の、齢は千代と聞こえつる、松浦鰯に蝦夷塩引、乾鮭、干鯛、鱧、鱸、鮓、 かべ、鵠、菱食、腹斑、青鷺、 鴨、小鴨、鳶、烏、ねぐら求む そふ片鶉、雀、ひへ鳥 千鳥、さへ小鳥に似たる迄、 精進の数々は、牛蒡 煎豆、座禅豆、海松布、な 烏頭布、東山蕪、茎立、早蕨や、篠竹、淡竹、竹の子の、代々に久しき松茸や、平茸、栗茸、滑薄、調へ出し、盃を、今一つとぞ椎茸や、舞茸、紅茸、榎、胡桃、榛、石榴、有の実や、蜜柑、柑子、橘に、金柑、温州橘、梅法師、妙旦、なた柿、木練柿、谷の落椎、小栗や、白瓜、鴨瓜、烏瓜、たそがれ時の夕顔の、姫瓜にこそ古への光源氏の大將も、心を動かし給ひけり。

肴の数は何々ぞ。水織、羊羹、燕麦や、鼈羹、猪羹、つくね羹、砂糖饅頭、水花麵、食後、鶏卵、酒の名は、天野、島酒、白山酒、汲む手も匂ふ菊酒は、持ちながらこそ千代も経ん。かゝる色々求めつゝ、そのこしらへは様々なり。

(中略)

連歌過は、三献まいらせよ。磨付の座敷を飾り、天神の名号に三具足とりそへ、硯、文台は去年、浅井所より来り候梨子地の文台、又、奥の四畳半に茶の湯を仕、黒塗の台子に奈良風呂添へ、甌釜し合はせ、蓋置は火舎香炉、水指は抱桶、水こぼしには合子、絵は舜拳の花鳥、上下は金地の小紋の金欄、中は赤地の鳥襷、風帯、一文字まで結構を尽くせり。さがら天目を袋に入、黒台に据へ、茶は別儀を九十九に入、花は貨狄の船に生くべし。此九十九、貨狄は子細さまゞある道具也。

【解説】上に掲げた史料は御伽草子「猿の草子」の一部である。本史料の成立は、永禄4年(1561)～6年(1563)頃で、作者は、坂本の地に住し、日吉社に神官として奉仕しているような立場の人で、日吉社の歴史や人生の盛儀を子女にわかりやすく学ばせようとして作られたものと考えられている(沢井耐三校注「猿の草子」『室町物語集 上』(新日本古典文学大系))。

史料冒頭の「めでたし」以下は、結婚が決まったのでそのために調べようとした道具を記した記事である。「十六日の座敷」以下の記述は、結婚後めでたく子どもが生まれたので、婿呼びを計画して十七献の準備をするため邸内を飾り、美物(海産物・鳥などの美味しいもの)・肴を購入した記事である。この史料から当時の嫁入り道具、饗宴のための邸内の飾りと美物・肴・酒、連歌会・茶会において設えられるモノがどのようなものかがわかる。

本稿では、史料に記された地名について考えてみたい。まず、茶会において設えられるモノの中で唯一地名が記されるモノとして奈良風呂があることに注目したい。都市坂本の人々にとって、風呂といえは奈良風呂であったことがわかる。また、饗宴のために取り寄せられた美物のうち、地名がつけられた美物は、明石鯛、伊勢鯉、伊勢蛸、近江鮎、松浦鰯、蝦夷塩引、東山蕪であった。

さて、これらの美物はどこから入手したのであろうか。九州や北海道に出かけて鰯や塩引を手に入れたのであろうか。本史料では、これらの美物を「上は兵庫、尼崎、下は越前敦賀の津、若狭は小浜の辺までも、飛脚を遣はして」入手したとある。明石鯛・松浦鰯・蝦夷塩引は、兵庫・尼崎・敦賀・小浜よりも遠方の美物であるが、これらの美物は兵庫・尼崎・敦賀・小浜もしくはそれらの地域よりも近い地点で購入したのである。美物の購入範囲は、西は兵庫・尼崎、北は敦賀・小浜であったのである。

嫁入り道具は京・堺で調べたと記されている。都市近江坂本の富裕な人々が嫁入り道具や饗宴の美物を調達する範囲は、京をはじめ堺・兵庫・尼崎・小浜・敦賀であったことがわかる。この史料における買物の主体は京の隣の坂本の住人であったが、この史料から首都を中心とした物資の流通圏を考えると、西は堺・兵庫・尼崎、北は敦賀・小浜ととらえることができよう。

考古学のための梅花無尽蔵解説 城の施設・祠堂

皆川義孝

文明18年(1486)2月25日

余此寓武之江戸城、々有丞相祠堂、栽柳挿松、不知幾数百株、

【解説】文明18年2月25日、万里集九は太田道灌から江戸城内に居を与えられ入城した。万里は、江戸城内に数多くの柳や松が植えてある丞相祠堂(菅原道真を祭る神社)を見た。この記事から江戸